

理学療法士養成校におけるポジショニング認知度調査 ——生活期患者に対するポジショニング手法を授業として行う意義の検討——

理学療法士学科昼間部

【はじめに】

今日、生活期ではリハビリテーションの介入が大幅に制限される中で、寝たきりなどの重度要介護者へは二次的障害の予防としてポジショニング手法が用いられている。また、職種間の共通認識として理学療法士（以下、PT）がリーダー的存在となり姿勢活動ケアを行っている施設も少なくない。しかし、PT養成校の授業内容には生活期における重度要介護者への治療技術の内容は少ない傾向にあると感じている。

今回、本校に在籍するPT学科の学生を対象にポジショニング手法の認知度を調査し、認知している学生とその理由に一定の傾向を認めたのでここに報告する。

【目的】

臨床ではポジショニングに対する指導はPTに関わる機会が多いものの、学校では多くの時間を割いて学ぶ事が無いのが現状である。このため、どの程度の学生がポジショニング手法を重要と感じているのか疑問に思った。また、学校では学ぶ機会が無くても認知している学生は、認知していない学生との間でどのような違いがあるのかを明確にすることで授業以外での学ぶ機会を知ることが出来ると考えた。最後に、ポジショニングについて学びたいとの希望から、興味や意欲を聞き取り取る事でポジショニングの授業を行うべきか否かの必要性を検討したい。

【方法】

対象者は本校、大阪医療福祉専門学校に所属するPT学科の昼間部127名の学生を対象にアンケート調査を行う。アンケートの内容はポジショニングに対する認知の有無、認知している学生に対してどのような場面で知り得たのか、今後学ぶ意欲はあるかなど計10項目とした。

【仮説】

仮説1) 認知度において、PT学科全体では、学校授業では指導のない内容であるため、認知度は低いと考える。

仮説2) 学年間では最終学年になるにつれ、認知度はある程度は高まると考える。これは実習施設にもよるが、臨床実習で触れる可能性が高いからである。

【結果】

認知度では初年次学年10%、評価学年38%、最終学年61%が知っていると答えた。また、ポジショニングという姿勢を考えたアプローチ方法を学ぶ必要の有無を問う質問に関しては、85%の学生が必要と感じているとの結果であった。また、ポジショニングの知識は必要であると答えた学生に対し、どのようなところでポジショニングを必要であると感じるのか、褥瘡・拘縮などの二次的障害予防、日常生活行為の遂行、誤嚥予防、その他の4つの選択肢を用意した。結果、69%の学生が二次的障害予防のため、11%が日常生活行為の遂行、19%が誤嚥予防、1%はその他に必要であると回答した。

【考察】

最終学年から学年が下がっていくにつれて認知度は下がっており、各学年がポジショニングを知るきっかけに差が見られた。最終学年と評価学年においては学校の授業で脳血管疾患患者の脱臼予防のポジショニング等を習うため認知度は高くなり、初年次学年では知る機会がほとんどなく認知度が低いと考えられる。

各学年に共通して生活期・維持期でのポジショニングについては学校で学ぶ機会が限られているのに対し、85%の学生がポジショニングなどの姿勢を考えたアプローチ方法を学びたいと感じている結果となった。ポジショニングの効果を調査した先行研究によると、褥瘡や嚥下・呼吸機能の維持促進、筋緊張の緩和と関節拘縮の防止など多くの効果が報告されている。

今回のアンケート結果から69%の学生がポジショニングの効果は二次的障害予防であると考えており、その他の日常生活行為の遂行や誤嚥予防の効果については認知度が低い可能性があることが示唆された。このことからポジショニングを学びたい学生が多数のポジショニングの効果について知り、ポジショニングの技術を得ることは学生にとって意義のあるものである事が考えられる。

【文献】

- 1) 北出貴則監修：ポジショニング実践ハンドブック。アイ・ソネックス株式会社。岡山，2017，1-36。
- 2) 高橋明美，永吉恭子・他：寝たきり高齢者へのポジショニング効果の考察。第49回日本理学療法学会大会，41(2)